

重入非常時である。對内非常時は老々の力のみでは容易に解  
 決し難いものがある。美濃師學説に對しては舊々たる輿論が  
 巻き起つた、大義の面には何物もない、場合に依りては大切  
 な救さへ救さねばならぬやいなす處に同つては男往進せよ  
 先輩は國の爲節も一家も括てて、斃れて居る、それに反して  
 三十年來國體に働かざる百餘を以て學者と認められたる者は  
 學者ではなくして國賊である、昔ならば三條の刺原の象木に  
 かりられたであらう、起訴猶豫は有難き極みである。往年の  
 武士ならば腹を切る處たそれを未だなし得ざるは見下付來て  
 た者と恥しむたい、此の問題に對し内閣は態度明白を缺いて  
 あるこれで皇太后局の處置は出来ないこんな海軍入府のある  
 ことを今迄知らなかつた東郷大將と比較して見よ、此の間に  
 非常時は進へず進んでゐる。颯風は九州の途に急行してゐる

國にありて言ふことを言はされば怪文書も亂れ飛ぶであらう  
 君々の先輩の首が京都、江戸の地に轉ひ王政復古は放つたの  
 だ、重臣ブロックを撃滅せよとの聲がある唯々であるかは言  
 へないが内大臣も天皇補弼の一人であり侍従、内閣、樞密院  
 顧問等これ等の内に重臣が多い、君の爲國の爲にならざる事  
 を考へてゐる人ありと聞く時斷腸の思かする、實公の心情を  
 偲ひて一本、美濃師の如き者あるを映く、美濃師は何たる不  
 動業者か、起訴猶豫の愚典に浴す可き人間か、こんな學者な  
 くとも日本の學問は潰れはせぬ。

軍人の後押なくては何事もなし得ない愛國志士は駄目だ、私  
 州に最後の一人となつても愛國の熱血は迸はしる七月十五日  
 柳尋龍長に御白にかかつた時何かやるなと言はれた、自分も  
 何かやらねばならんでせうと言つて別れたのであるが、明